

過去の地震から知る、未来の備え ～余震が、人々を避難させる

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■周囲で家が倒れたのは一軒だけだった。あとは瓦がずれたり、ちょっと傾く程度の被害だった。しかし、全壊を免れた家でも、余震が多いために住んではいられなかった。布団や着るものを家の中に取りにいくのも苦労した。(碧海郡明治村東端集落(安城市東端町) 杉浦隆三 さん)

家はみな、ちょっと傾いていて、潰れなかったけど、余震が1日に何回となく来るもので、うちの中に住まうことなんかできんでね。

1月だもんで寒いだでね。ほうで、布団か何か取ろうと思って、母屋の中へ入ろうと思うと「ガタガタガタ」と余震がくる。ほして飛び出る。ちょっとやんだでと思って中へ入ると、また「ガタガタガタ」と。布団や着るものを持ってくるまで、3べん4へん入っても、なかなか布団のあるところまで行けへんの。



絵 藤田哲也

「災害発生後、小学校の体育館などの中で、たくさんの人々が寝起きをしている避難所の写真」を見たことはありますか。夏は暑くて冬は寒く、窮屈で寝返りも打てず、風邪などすぐ蔓延する。体の弱い人や高齢者にとって特に過酷な環境です。しかし「うちは耐震補強をして壊れない家を作っている。だから避難所には行かなくていい。大丈夫！」という人がいます。本当でしょうか。

2004年新潟県中越地震の被災者に行った調査では、震災当日に自宅にいた被災者は全体の10.7%(約10人に1人)しかいませんでした。ではどこにいたのかというと、テント・車の中・車庫・駐車場という屋外避難が、震災当日(68.1%)から震災後2~4日(57.5%)まで最も多い避難先になっていました。また、小学校などの避難所は、震災後2~4日(13.1%)から利用され、震災後2週間(15.8%)でピークをむかえ、震災1ヶ月後は8.0%でした。ここで注目すべきは家屋被害がなかったり、一部損壊だった人も、多くが屋外に避難していて「どんな家屋被害程度でも屋外に避難していた」ことです。そしてそれは「余震による家屋被害・家屋倒壊」を怖れていたのです。

2004年新潟県中越地震では「震災関連死」で亡くなる人が注目されました。消防庁では「災害発生後疾病により死亡した者の内、その疾病の発生原因や疾病を著しく悪化させたことについて、災害と相当の因果関係があるとして関係市町で災害による死者とした者」と定義しています。70代以上の高齢者に多く、災害発生から1~2ヶ月後に死亡する人が急増します。屋外や避難所などで夜を明かす覚悟と備えはできているか、高齢者・持病がある人を被災地外へ迅速に送り出す手はずを整えているか。建物が無事だからといって、私たちの命はそれだけでは守れたことにはならないのです。「余震」に対するイメージと備えも必要です。